
Jewelry box

もりの華咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jewelry box

【コード】

N1601N

【作者名】

もりの華咲

【あらすじ】

医療福祉専門学校に通う4人の介護福祉士の卵たちが、パワーストーンと共に歩んでいく恋話です。フィクション50%、ノンフィクション50%なのでハッピーエンド、バッドエンドありますが、最後にはハッピーエンドで卒業を迎えてくれたらいいなと、思っています。

プロローグ

今回の話の舞台となるのは、内陸工業都市、T市。市内に一つしかない駅を中心に西南には、市の工場誘致政策と共に進出してきた有名企業の工場が数多く建ち並び、工場からの機械音と整備された道路を行き来するトラックの騒音が絶えず響く。都会ではないが、田舎の自然や澄んだ空気は存在しない。無機質、人工的、そういう類の言葉がよく似合う土地。

だがその一方で、駅周辺では西南とは全く色の異なる風景を目にすることが出来る。

歴史を感じる商店街、間に植えられた街路樹。至る所に広がるグラウンドの傍に聳え立つ校舎の数々。

元気に走り回る子供達や陽気な若者の声が通り過ぎるこの場所には、小中高はもちろん、大学、短大、専門学校などが肩を寄せるように並んでいる。

駅前にあるT市唯一の大型ショッピングセンターを覗くと、学生客を対象としたオシャレなショップが、あちらこちらでキラキラと輝いていた。入り口横の某ファーストフード店は、若者達の語らいの場だ。

そのファーストフード店の店内。

窓際が一番端のテーブルに、今回の話の主人公である四人の少女の姿がある。少女とはいつても現在十九歳。今年二十歳の成人式を迎える。

大人と子供の境目を向かえ一番楽しい時期を過ごす彼女達は、このショッピングセンターに程近い医療福祉専門学校に通っている。高齢化社会を支えていく介護のエキスパート。介護福祉士の卵達なのである。

とはいえ、高校卒業後そのまま専門学校に進学した彼女達に、その意識が十分に備わっているとは言えない。

一年間しっかりと勉強をし実習にも参加したものの、社会経験を積んだ後、同じ学校に通う同級生と比べれば、天と地ほどに意識に差が出ている。

二年目の春を迎え、来年には介護福祉士として実際の現場へ出て行くというのに、こうして集まっている間に出ている会話も、テレビの話、オシャレの話と、年頃の少女らしいといえれば少女らしい、たわいの無い話ばかり。

先に明かしてしまえば、これから綴っていく話も又、彼女たちが立派な介護福祉士に成長していく様を描く感動秘話ではなく、二十歳を迎える彼女達の恋愛をメインに描いた、たわいの無い恋話にすぎない。

常日頃から彼女達の意識の薄さに頭を抱える専門学校の講師には怒られるかもしれないが、わざわざ急いで大人の階段を上る必要などあるのだろうか。

世の中はたわいの無いことの繰り返しで、その中から得るものも数多く存在している。学生の間しか経験できない事柄やそこから得る考え方は、これから生きていくうえで糧になってゆくものだ。

学生最後の一年間。

今はまだあどけない表情で笑っている彼女達は、これから先に起こるうとしていた未来を予測もしていない。

たわいの無いことの繰り返し。だがそれは、ずっと先の未来から振り返ってみればの話で、その時を生きる者にとって自らを揺るがすほどの出来事であることは、決して少ないとは言えないのである。

プロローグ（後書き）

とつぶんは更新遅いと思います。
のんびりお付き合い下さい。

第一話・ジエイド（一）

「ごめん。バイトだから先に行くね。」

通学用に使っている、お世辞にも綺麗とは言えないジーンズ生地
のバッグ。そのバッグの紐を掴み立ち上がると、いつてらっしやい、
と声がかかる。

ヒラヒラと手を振る三人の友人に、自然と笑みが零れていた。

入学当初から付き合いがある三人との時間は、過ぎるのが早い。

周囲から必要以上に干渉されることを嫌う彼女達だから、熱く語り
合う仲でもなければ互いの全てを理解している間柄でもないが、そ
れでも、いや、だからこそ、気がつけば四人で行動している。

やたらと群れたがり噂話と恋愛トークしか出来ない女友達という存
在は、正直、面倒だと思っていた。専門学校に進学したところで、
それは変わらないものだと考えていた。

己の境界に踏み込まれるのを嫌うから他人の境界にも踏み込まない。
陰口を好まず腹黒さを感じない。専門学校で出会ったそんな友人達
を、朝倉麗奈あさくら れいなは自分でも驚くほど気に入っていた。

三人に手を振り返した後、自分のトレーを回収ワゴンの上に置いた。
足早にファーストフード店を後にし、上りのエスカレーターを目指
して歩き出す。

バイト先までは徒歩三分かかるか、かからないか。麗奈のバイト先
は、このショッピングセンターの二階にある。

平日の夕方、一階の食品売り場は人で溢れていても、それ以外の店
の客入りは知れている。エスカレーターが上りきると、予想通り客
足はばらついていた。

ティーン向けのブランド服を扱うショップを通り抜け、ファンシーショップの前を通り過ぎる。トイレと非常階段への誘導看板が目に入り、角を曲がってそれとは逆方向に進めば、東南アジアのイメージを色濃く意識したアクセサリーショップの看板が見える。

「おはようございます。」

「ここが、麗奈が働いている店。」

パワーストーンと呼ばれる石で作られたカジュアルなアクセサリーを、学生でも手の届く低価格で扱っている。

麗奈の人生において初のアルバイト経験となるのがこの店で、働き始めた当初こそ時間を問わず、おはようございます、と店長や他のバイトに声をかけるのは抵抗があったものの、二年目となればさすがに慣れたものである。

「おはよう、朝倉さん。」

挨拶を返してきた店長の竹下さんは、まだ三十五歳。淡い色合いの麻のドレスと同系色のバンダナが定番スタイルで、この店のイメージと良く似合っている素敵な女性。

バイトに服装の指示がないのは、竹下さんのような服を全く持っていない麗奈には救いだ。店の奥でショップ名のはいつたベージュのエプロンを服の上から素早く身に着け、表に戻った。

仕入先から届いたダンボール箱を開け、袋詰めされている商品を陳列棚に飾るため袋から取り出す。傷がついていないか、金具の不具合はないか、そこまでやれと竹下さんに言われているわけではないけれど、いつの間にかチェックする癖がついた。

敷居の高い宝飾店に並ぶ高価な宝石たちとは別の魅力を持つ色鮮やかなパワーストーンは、ただの変わった色をした石ころのようで、実は様々な伝承や効力がある。

この店でバイトを始めたのは、条件が合うバイトを求人広告で探ししていたら偶然目についた、というありがちな理由なので、パワース

トーンという物の存在を知ったのは、採用が決まり実際に働き始めてからだ。

伝承や効力については、来てくれるお客様のほうが詳しいなんて日常茶飯事。顔から火を噴く思いも何度もしてきた。さすがに今は店に並ぶ石の名前と効力ぐらいは覚えただけ、伝承までとなると自信がない。

ちなみに、バイトを必死に頑張らなければならないほどお金に困っている貧乏学生というわけではなくて……。それどころか麗奈は、世間知らずの箱入り娘である。ただし、他人にそういう扱いを受けることを麗奈自身は嫌っているが。

家を出たかった。そのためなら、本当は何処でもよかった。

福祉の道を選んだのは、麗奈の父親の会社が医療、福祉機器を扱っているので身近だったということと、卒業するだけで取れる介護福祉士という国家資格に魅力を感じたからだ。

中でも専門学校への進学に絞ったのは、麗奈にはあまり時間がないから。大学はまず無理だった。就職するには期間が半端すぎる。同じ二年なら短大にしろと両親は言ったが、素直に親の言うことを聞く娘なら最初から家を出る道など選んではいけない。

残り一年。

今の生活は自分に合っていると麗奈は思う。

学校の女子寮である狭いアパートに一人で暮らし、学校が終わった後と土日は、こうしてこの店で働いている。気の合う友達まで出来て、あらゆる面で満たされた日々。もし叶うのならこの生活が永遠

に続けばいい。

パワーストーンにお願いしてみる？。

キラリと光る石をかざし、自分がいかに非現実的なものを信じない人間かが分かると、苦笑しながら棚に並べた。

第一話・ジエイド（二）

携帯電話の着信に気がついたのは、それから四時間後。バイトを終えて店を出た直後だった。

画面に表示されている名前を見つめて、麗菜は眉を顰める。かかってきて欲しくない相手からの着信なのだから、この反応は当然だった。

面倒だと思っても、無視は出来ない相手だ。

留守番電話につながってくれることを願い、折り返しのコールを鳴らした。

「はい。」

「・・・麗菜です。何か急用でしたか？」

願いもむなしく、たった2コールで繋がってしまった電話に、麗菜は肩を落とす。

どうせたいした用件はない筈。一刻も早く電話を切りたいという意思表示をしても、

「お久しぶりです、麗菜さん。お変わりありませんか？」

この人には通じない。

「はい、特に。博文さん、それでご用件は？」

「仕事が早く片付いたので、食事でも一緒にどうかと思ひまして。」

「食事はもう済ませましたので。」

「ではお酒でも、と言いたいところですが、麗菜さんはまだ未成年でしたね。」

「明日も学校がありますし、今回はお断りしたいんですけど。」

「そうですね、残念ですね。では又の機会に。次回は社長を通して約束を取り付けることにしましょう。」

「な。。。」

「お忙しいところ失礼しました。では、また。」

「。。。。。」

一方的に切れた電話を見つめ、投げ捨ててしまいたい衝動に駆られた。勿論、後悔するのは目に見えているから、衝動にまかせるようなことはしないが。

尾崎博文、麗奈より八つ年上の二十七歳。今の電話の相手だ。

一言で表せば、食えない男。もっと言うなら、気味の悪い男。

三年前の麗奈の誕生日。

変わり者で有名な麗奈の父親が、麗奈へのバースデープレゼントだと突然何処からか連れて帰ってきたのが、博文だ。

その日から何故か、同じ屋根の下で実の娘以上に丁重な扱いを受けながら暮らすようになった博文は、今年度から麗奈の父親の会社で専務として父親を支えている。

大きくはないが歴史がある父親の会社では、時代遅れながらもまだまだ年功序列で役職が決まる。二十七歳の若さ、しかも入社して三年程度の男が専務になるなど、青天の霹靂とも言える異例の出世であった。

そしてもう一つ。

これが一番厄介な問題で、来年麗奈は、博文との結婚が決まっている。

つまり麗奈にとって博文は、婚約者ということになる。

一人娘である麗奈に会社を継がせる気など、父親の頭には最初からなかった。だからこそ、両親そろって博文を大切にするのだ、とい

うのは結婚の話が出てから麗奈が勝手に推測したこと。博文の素性は知らない。聞いても教えてもらえない。最初は隠し子かと疑ったが、どうも違うらしい。まず異母兄妹ならば、結婚という文字は出てこなかっただろう。実の親ながら変わり者の父親の考えていることは、麗菜には全く分からない。母親が何故、そんな父親の援護をするのかも。ただ、そういう何処の馬の骨とも分からない男に会社を託すには、麗奈との結婚が一番早道だということぐらいは分かる。そうでなければ、古くからの役員たちの理解を得るのは難しいはずだった。

麗奈に変な虫がつく前に博文と結婚させてしまいたい、という父親の陰謀を麗奈が拒否することは、完全に家との関係を切ることが出来ない現段階においては非常に困難である。

本来なら麗奈が高校卒業した時点ですぐに結婚となる予定だったが、両親と毎日のように繰り返し返した言い争いの末、そこは何とか回避した。ただし、条件付だ。

麗奈に与えられた時間は二年。その間は世間に恥じない程度なら、何でも麗奈の自由にしていいと両親は言った。しかし博文との婚約関係だけは、どれだけ望んでも解消されることはない。何が自由だ、聞いて呆れる。この二年という時間だって、所詮は博文が会社を継ぐために土台を固める、準備期間でしかないのだから。

就職して家と完全に関係を切ることが出来れば、それが一番望ましい。収入面では、介護福祉士という国家資格は強い見方になってくれるだろう。

だが、麗奈まだ迷っている。あと一年しかないというのにだ。心から両親を嫌っているわけではない麗奈にとって家との関係を切るということとは、何よりも辛い選択であった。

気分は憂鬱。足は鉛。博文と話したあとは、いつもこの症状に悩まされる。

食えない男ではあっても、博文は麗奈には誠実に接してくれる。短い期間ではあったが、博文のことを兄のように慕っていた時期もあった。頭はキレるし、顔も悪くない。それでも結婚対象として見ることが出来ないのは、やはり博文のことを気味が悪いと思ってしまうからだ。

正体も裏で何を企んでいるのかも分からないあたりは、変人の父親より性質が悪い。そんな男と例え形だけであつたとしても、結婚したいとは思えなかつた。

第一話・ジエイド（三）

ショッピングセンターから麗奈の暮らす女子寮までは、徒歩五分。自転車だと、あっという間に辿り着いてしまう距離である。

女子寮とはいっても、普通のアパートとあまり違いはなく。右隣には歯科衛生科の後輩が、左隣には社会福祉科の同じ年の子が一人で暮らしている。何故介護福祉科の生徒がいないのかといえば理由はすぐ簡単で、この女子寮から介護福祉科の校舎までは、自転車で十五分もかかってしまうからだ。

歯科衛生科、社会福祉科、精神福祉科・・・etc、麗奈の通う学校は、医療福祉系のクラスを抱える規模の大きな専門学校だ。それだけに、Ｔ市内に校舎は四つ、女子寮だけで六箇所もある。他地方からきた大抵の介護福祉科の生徒は、介護科校舎から徒歩三分以内の寮に入っていて、麗菜の友人たちも皆、その寮から学校に通っていた。そもそも友達づきあいも馴れ合いの関係も面倒だと思っていた。麗奈は、全て予測した上で一番遠いこの寮を選んだのだ。

科も校舎も違うお陰で全く関わりのない隣人たちとは互いの引越しの日に挨拶こそ交わしたものの、その後は偶然顔をあわても話しをする機会はない。人間関係の煩わしさを嫌う麗奈にとってこの寮は、とても住み心地の良い場所だった。

鍵を開け玄関の扉を開くと、お気に入りのアロマローズの香りがふわりと鼻を掠めていった。

1kの狭い部屋には、仕送りとバイト代で揃えた必要最低限の家具しか置いていない。初めて父親が部屋を訪れた時、その狭さと飾り気のなさに驚き、近くにマンションを一部屋借りてしまったほどだ。せっかくなのでそのマンションは寮に置けない荷物の置き場として使わせてもらっているが、あくまで普通の生活に拘る麗奈は、この

部屋で質素な生活を満喫している。

軽くシャワーで汗を流すと、麗奈すぐに、簡単な食事をテーブルに並べた。

博文には食事は済ませたと言ったが、あれは当然嘘だ。嫌いな相手と食事を共にするぐらいなら、一人で食べたほうが、まだ美味しく感じるというものだろう。

お腹がすいていれば、自然と食も進み。早々と食事を終わると、綺麗になったテーブルの上に、今度は学校のテキストとノートを広げた。

専門学校の勉強は侮れない。決して高校までも侮っていたというわけではないけれど、全く新しい分野の知識をゼロから学ぶというのは、意外と大変なのだと感じる。高校まで三十点以下だった定期テストの赤点は、専門学校になると六十点以下。赤点をとつても一度だけ追試のチャンスが与えられるが、追試の合格点は九十点。これを落とすと、即留年。

一年時八十人いた介護科の生徒は、二年になると六十人に減った。つまり二十人は留年し、その中の数人はそのまま学校を辞めてしまった。さらに介護科の場合、留年が決まるのはテストだけではない。一年時に二回、二年時に一回、実際の施設で行われる長期実習でも、現場に働く職員に合格点が貰えなければ、再実習後、留年の審判にかけられる。国家試験を受けずに国家資格が取れるのだから、これくらいは仕方がないだろう。

一時限につき九十分。毎日みっちり五時限目まである授業の復習は、量にすればかなりのものだ。刻々と時間が過ぎていく中で、教科書とノートの知識をひたすら頭の中に詰め込んでいく。やっと三教科の復習を終え一息ついた時、部屋のチャイムが鳴った。

誰？。

時計の針は二十三時を過ぎていた。来客自体珍しいことなのに、この時間ではさすがに新聞の勧誘すら来ない。

部屋には、実家やマンションのようにカメラ付のインターホンは設置されておらず。仕方なく玄関のドアの小さな覗き穴から外の様子を窺ったが、外が暗いこともあって来客の姿をはっきりとは確認出来なかった。

唯一、黄色い髪だけが、薄闇の中でくつきりと浮かび上がり少し怖い。専門学校では染髪とピアスは校則違反。同じ学校の人間ではないことは確かだった。

誰だろうと悩んでいるうちに、二度目のチャイムが鳴る。

もしかしたら部屋を間違っているのかもしれない。だとすれば、教えてあげたほうが親切というものか。

ドアチェーンを外さずに鍵を回す。少しだけ開いた扉の隙間から、「あつ、いた。」と飛び込んできたのは、子供のような甲高い声。扉を開けて初めて分かったが、立っていたのは二人の男。覗き穴から見えた背が高い金髪の男と、そのすぐ後ろに、黒髪をカチューシヤでバツクに流している背の低い男がいる。

背の低い男の名誉のために言っておくと、麗奈の身長は168cm。玄関の段差を差し引けば目線が同じ高さなので、同等ぐらいの背丈だと考えて欲しい。ちなみにさっきの子供のような声を発したのは、背の低い方の男だった。

第一話：ジエイド（四）

「こんばんはー。」

金髪の男がテンション高く挨拶をしてきたので、思わず麗奈も「こんばんは。」と返した。性質の悪い酔っ払いなら勘弁だ。いつでもドアを閉められるよう、ノブを握る手に力がいいる。

「あー……。」

「あ、俺たち隣の者ですけど。」

「……はあ。」

ここは女子寮。隣の住人の顔は知っている。ありえないことを言い出す金髪の男に、麗奈は顔を顰めた。

「正確に言うと、隣の人の部屋に居候しているものですけど。」

麗奈の反応に気がついたのか、慌てて金髪の男が付け足した。どっちの隣かは知らないけれど、ようするに、男を部屋に連れ込んでいる、ということらしい。特に監視の目があるわけでもない女子寮だから、それならば納得はいく。週末に見かけない車で寮の駐車場が埋まるのは、見慣れた光景だった。

「それで……なにか?。」

「お話ししようよ、部屋に入れて。」

部屋に入れてなどと悪びれもなく言ったのは、背の低い男の方だ。声変わりを経験していない年には見えないが、声も仕草も愛らしい。謎の発言ばかりを繰り返す来客に不信感が募った。それなのに麗奈が強い拒否の姿勢を示せないのは、二人がこの辺りではなかなか押めない甘いマスクを持ち合わせているからだろう。

「お話しならここで……。今部屋が散らかっているので……。」

「あ、じゃあ一緒に散歩しない?外、涼しくて気持ちいいよ。」

そうきたか、と少し考える。どこからどう聞いても怪しいのだが……。

「準備してくるので、少し待っててください。」

麗奈だって年頃の女だ。彼氏が欲しいとは思っていないくても、美男子には弱い。いろいろな意味で気分転換したかったのも本当で、一度扉を閉めたあと、出かける準備をするため部屋へと戻った。後輩の知り合いだから危険はないだろう、と安易に考えてしまうところが、麗奈が世間知らず、と言われる理由である。

背の低い男が言ったとおり外は本当に涼しくて、静かな夜道は散歩には最適だった。

のんびりと歩いて駅前まで来たとき、「ちょっと座ろうよ。」と背の低い男、改め、コウが、歩道と駐車場の境になっっている段差を指した。

ここまで歩いてくる間の短い会話で名前を尋ねられ、今更ながら用心深く苗字を名乗った麗菜だったが、「下の名前は?。」と再度尋ねられたことで、結局フルネームを明かす結果になってしまった。

一方の男二人はといえば、偽名だか本名だかよく分からない名前を明かしたのみ。ズルイとは思ったけれど、勉強にはなった。

促されるままコウの隣に腰掛けると、続いて金髪の男、改め、アキも麗奈の隣に座る。

コウとアキ。まるで女の名前のようで、中性的な雰囲気を漂わす二人の美男子にはよく似合っている。

見た目は十八、九でも、子供っぽさが抜けないコウは十六歳、現役の高校生らしい。コウに比べると落ち着きを見せているアキは二十一歳、モデルなんだとか。確かに顔もいいし背も高いアキだが、その立ち振る舞いからモデルらしさは感じない。無名か自称か、少なくともファッション誌を賑わすモデルでないことは確かだろう。

それにしても気になるのは隣の住人の方。高校生とモデルを部屋に居候させている彼女は、一体何者なのか?。ちなみに隣というのは、右隣。歯科衛生科の後輩の部屋の居候なのだそうだ。

「あの狭い部屋に三人で住んでるんですか?。」
「いやいや。」とアキが笑いな探りをいれるために麗奈が訊くと、「いやいや。」とアキが笑いな

がら否定する。

「ミサ……って麗奈ちゃんのお隣さんね、実習で実家に帰ってるから、その間留守番も兼ねて住まわせてもらってるだけ。」

「俺は、アキさんに呼ばれて遊びに来ただけだね。」

「あ……なるほど。」

ランダムに振り分けられる介護科の実習でも、車やバイクがないと通えないような実習先は多い。そのどちらも持っていない麗奈は、一回目の実習は電車で片道一時間半かけて通い、二回目の実習は、同じ実習先だったクラスの子に最寄り駅から送り迎えをもらった。今年の秋には最後の実習が行われるが、その前に車の免許を取りにいこうかとも考えている。実習先が実家の近くならば、隣の後輩のように実家から通うほうが楽だろう。しかしたからといって、留守中に他人を自分の部屋に住まわせるようなことをするだろうか？。自分なら絶対しないな、と苦笑しながら麗奈は頷いた。

第一話：ジエイド（五）

「ところで麗奈ちゃん、彼氏いるの？」

「……え？」

唐突なアキの質問に、麗奈は表情を曇らせる。咄嗟に浮かんだのは博文の顔で、それがひどく不快だった。

「……いますよ。」

婚約者なら、という部分はあえて口には出さない。「いるのかああ。」

「と美男子二人から落胆にも聞こえる口調で言われ、どう反応していいのか困った。」

「麗奈ちゃん何気におしゃれっ子だもんね、もてるでしょ？」

「いえ、全く。」

専門学校に入学してからというものの、今まで周りでは聞いたことがなかったような用語に触れる機会が多い。それでも、コウが言う、おしゃれっ子という言葉は知らなかった。

ニューアンスから着てる服を褒められていることは分かったけれど、あまり嬉しくはない。麗奈は意図的に地味で目立たない服を選んで、いるつもりなのに、それをオシャレだというコウの美的センスが、疑わしく思えた。

「またまたー。」とコウに腕を叩かれ「いえ、本当に……。」と麗奈は逃げながら返す。

実際もてないし、自分の容姿は毎日鏡を見ているのだから知っている。

女にしては、高めの身長。ポチャツと頬が膨らんだベビーフェイス。クセの少し入った髪は、特別な席以外はいつも後ろで一つに束ねていた。お金をかければ綺麗になる手段はいくらでも知っているけれど、そんなものは今じゃなくてもいい。出来るだけ目立たず普通の生活をおくることが、この二年間の最大の目的なのだから。

「麗奈ちゃん、イケイケドンドンの友達とかいない？」

「イケイケ・・・？。」

「またもやコウの口から出てきた新用語には、全くついていけない。」

「今度ばかりはニュアンスからも読み取れず、完全にお手上げ状態だ。」

「こいつ日本語おかしいよね？バカだから許してあげてね！」

「アキさん、ヒドッ・・・。」

「事実だろ。」

「アキさん絶対他人のこと言えないって！」

「は？。」

「バカレベルは同じだから。」

「一緒にすんな。」

「いやー。」

「おまえ・・・。」

「じゃれる美男子二人の間で、麗奈は笑ってしまった。表情をこころ変えて言い合う姿は、まるで子供の喧嘩だ。」

「それで結局、イケイケ・・・って・・・？。」

「うーん、可愛くて、ノリのいい子？」

「可愛いくて・・・ノリのいい・・・。だったら最初からそう言ってくれた方が分かりやすい。」

「基準をどこにおくのか悩むところだが、麗奈がいつも一緒にいる三人は、全員、麗奈より可愛いしノリも悪くない。ただ、一般男性視点から見るとおそろく・・・。」

「愛・・・かな。」

「口に出すつもりはなかったのに呟いてしまった名前に、コウの目が輝いた。」

「愛ちゃんって可愛いなの？」

「可愛いですよ。」

「どんな感じ?。」

どんな感じ・・・?と訊かれても・・・。

芹沢愛は、麗奈がいつも一緒にいる三人の中の一人。

×××と×××を足して2で割った感じ、とは、誰かを表現したい時によく聞く文句。この×××の部分に、必ず可愛い系女性タレントの名前が入るのが、愛だ。

150台の小柄な身長に平均よりややポツチャリした身体。愛は自分の体形にコンプレックスを抱えているが、傍から見ればそれも彼女の魅力の一つ。

大きな二重の目、クルンと上がった長い睫毛は、いつもマスカラが丁寧に重ねづけしてある。高くはないが形の可愛い鼻に、柔かそうな唇。まさに小動物タイプ。

それでいて小悪魔メイクを得意としている愛は、自分の顔はメイクで作られたものだなんて謙遜しているけれど、一度だけ見たスッピンも、2で割る必要を感じないほど可愛かった。

髪も服も流行に敏感で、入学当初から先輩達がわざわざ愛を見るためだけに一年の教室に群がっていた。二年に進級した今に至っても、その人気は不動。介護科はもちろん、別校舎の他の科の男たちまで、愛の彼氏の座を狙っている。

そんな愛に未だに彼氏が出来ないのは、理想が高すぎるから。

ようするに、同じ学校にいる程度の男たちでは相手にもされない。と愛本人が言ったわけではないけれど、カッコイイ人が好き、としつこく周りから好みのタイプを問われた愛が適当にあしらったことで、勝手に決め付けられてしまったようだ。

こう聞くと、まるで性格が悪い女のようにだがそれは違う。明るくて人懐っこい愛は異性は勿論、同性からの人気も高い。愛にフラれた男達が絶対に愛の陰口を言わないのは、愛の人間性が高く評価され

ているからだ。もっとも、陰口を漏らしたところで誰も取り合ってはくれないだろうけど。

とにかく、見た目も中身も可愛い女。愛は麗奈の自慢の友達である。改めてコウとアキの顔を見て、愛に紹介してみるのもいいかもしれないと思った。この二人の性格は掴めていないけれど、顔だけ見れば愛の隣に並んでいてもおかしくない。本当に愛が見た目がカッコイイ男が好きなのなら、十分許容範囲だろう。愛以外の他の二人も彼氏がいるという話は聞いたことがないし、もしかしたら、もしかするのかもしれない。

「でも、コウさんとアキさんって・・・彼女いますよね?。」

「いないない、全然いない。だからさ、その愛ちゃんって子、紹介して。」

「俺もないよ。」

懸念事項があつさり否定され、「それなら、紹介してもいいですけど・・・。」と一応、頷いてみる。まだ友人達に許可を得たわけではないので、紹介します。とは言い切れない。

「明日、友達に訊いてみます。」

「うわっ。楽しみ。」

そう言いながら無邪気に足をバタつかせるコウを見て、弟に欲しいタイプだな、と麗奈は思った。

しかしアキが、俺もない、と言ったのは意外だ。歯科衛生科の後輩と付き合っているのだと勝手に思いこんでいたが、どうも違うらしい。

それならば、一体・・・。

アキと後輩との関係は気になったものの、根掘り葉掘り聞くのも気がひける。麗奈が迷っているうちに、話題は別の方向へと変わっていた。

それから十五分ほど世間話をして、また三人で来た道を歩いて戻った。

アキの提案でメールアドレスを交換したあと、二人は右隣の部屋へ「またね〜。」と笑顔で去っていく。

隣であるの二人が寝起きしているのだと思うと、何だか不思議な気分だ。コウは遊びに来たと言っていたから普段はアキだけがそこにいるのだろうか、それだけでもやはり不思議な感じがする。明日友人たちに今日のことを話したら、どんな顔をするのだろうか。そう考えるだけで心は弾み、博文のことも、残っている復習のことも、すっかり頭の中から消えていた。

第一話：ジエイド（六）

昼休みの教室は、いつも静かで穏やかな時間が流れている。

学食などない学校で、弁当持参組はクラスの半分。あとの半分は外に出かけ行く。

ぼつかりと空いた教室の中央。ここ、介護2 - 1教室のお弁当組は隅に寄るのが好きらしい。それは麗奈たちも例外ではなく、普段どおり廊下側の一番端に寄せた机の上には、それぞれが持参したお弁当が広げられている。

「そんな出会いってあるんだねえー。」

昨夜のアキとコウの話に感慨深く頷いているのは、さわぐちまこと沢口真琴。

背中まで伸びた細くて長いダークブラウンの地毛が、頷くたびにサラサラ揺れる。濃い目の顔立ちはメイクをすると派手になるらしい。水商売の人によく間違えられるから学生の間はスッピンで通すのだと、真琴が以前言っていた。

「その人たちカツコイイの？」

「うん。カツコイイ。」

愛の問いに麗奈が即答したのは、こちらの返事次第で愛の出方が変わるのを知っているからだ。

とにかく人気者の愛だから、普段から飲み会や合コンの誘いは跡を絶たない。どこで誰が聞いているか分からない教室内。やんわりと周囲の誘いに断りをいれる愛を出会いの場へ連れ出すならば、例えば友人であっても確かな理由が必要だ。

愛自身それをよく分かっているのだろう。麗奈の返事にホツとしたような顔を見せた。

「でもせっかくなら、週末にゆっくり会いたいねー。」

「あー確かに。麗奈、週末のバイトの予定どうなってるの?。」

まだ話は紹介するか、しないか、という段階だったはずなのに、すっかりノリ気の真琴と愛に笑ってしまった。愛が週末にゆつくりなどと言い出したのは、紹介ついでにオールの飲み会になる可能性を想定したからだろう。コウは高校生なのだし、さすがに飲み会は無理なのでは？とは思ったが、あえて口にはださなかった。わざわざこの場の雰囲気壊してまで口にはださなくても、この三人なら気づくのは時間の問題だ。どちらにしる、集まる時間は夕方から夜にかけてと限られてくるのだし。

「金曜は学校終わってラストまでバイトだから無理かもしれない。土曜の十八時以降なら大丈夫だよ。」

四人の中で、バイトをしているのは麗奈だけだ。けっして皆が皆裕福な家庭に育っているわけではないのだろうが、学校側の職種規制が厳しいことや実習中は完全にバイトを禁止されていることもあって、生徒の大半は学業に専念している。よって四人で集まるうとうときに麗奈のバイトの予定が優先されるのは、よくあることだった。

「香奈恵は？どうする？」

一人だけ麗奈の話に興味を示さなかった日高香奈恵ひだか かなえに心配になって尋ねると、香奈恵が「うーん」とクビを傾げた。

香奈恵は、頭もいいが素行もいい。つまり、とても真面目な子だ。だからといって地味だとか暗い印象はなく、ショートカットの黒髪に丸い顔は周囲に陽気な印象さえ与える。

麗奈が心配だったのは、香奈恵が真面目だからという理由ではない。はっきりとした自分の意思を持っているにも関わらず、香奈恵はとても他人に気をつかう。一対一ならまだ本音を聞きだせるが、こういう流れになると絶対に自分の意見を言おうとしない。首を傾げたのもおそらく、ノらないけどノリ気の周りに気をつかっているのだろう。

「ノらないなら、無理しなくても……。」

「ううん、大丈夫、かな？」

そう笑う顔は、全然大丈夫には見えない。こういふとき麗奈は、自分が鈍感な人間だったらよかつたと思う。いつからそうだったかは覚えていないが、話している相手の本心を探ろうと無意識に相手を観察するようになっていた。必死に本心を隠す善良な人間にまで同じことをしてしまうのだから、あまりいい癖とは言えない。本人が大丈夫だと言っている以上どうこう言う権利はないけれど、無理をさせるのは心苦しい。

「場所は？」

真琴の問いに、麗奈を含めた四人の顔色が変わった。

干渉を嫌う四人だから、顔色を変えた理由は共通している。よく知っている他三人だけならまだしも、正体不明な男二人を自分の部屋に入れるのは抵抗があるのだ。だったら外で……。という話しにならないのは、外で飲明かすだけのお金の余裕がない上に、そういう場所もよく知らない、という他地方から集まって来た学生らしい事情が絡んでいる。

「いつものアレだね。」

「だよな。」

「うん。」

「いくよー。」

「ジャンケン。」

「ポンッ。」と同時に中央に出された手。チヨキが三人。パーが一人。ホツとしたのも束の間、パーを出した手の持ち主を確認して気まずさが沸く。

「うちかぁ……。」

小さく息を吐いた香奈恵に申し訳なさを感じるも、既に勝負は決まってしまったのだ。他の二人の手前、今更変わるうかとはとても言えない。

場所が決まったことで当日の服装へと話が変わった三人の声を耳に入れつつ、空になったお弁当箱を片付けついでにバッグから携帯電話

話を取り出した。アドレス帳から目当てのアドレスを呼び出し、メール作成の画面に切り替える。

紹介の件ですが、友達の承諾が取れました。

土曜日の十八時以降に友達の家に集まりたいと話をしているのですが、そちらのご都合はいかがでしょうか？

硬すぎるかな・・・。

文章を読み直してどうしようかと一瞬躊躇ったメールを、麗奈はそのまま送信した。

宛て先は勿論、美男子二人。

第一話：ジエイド（七）

土曜日の夕暮れ時に響いたチャイムの音は、麗奈の部屋のものと同じだ。

まさか自分が隣の部屋のチャイムを再び鳴らす日がくるなんて。引越しの挨拶にこの部屋を訪れた時のことを思い出し、麗奈は微かに口の端を上げた。

当時この部屋には、やはり歯科衛生科に通っている先輩が住んでいた。開いた扉から出てきた先輩は、背は低かったけどオシャレで可愛い人だった。後輩なのに見下ろす形になってしまった麗奈に、新入生？ と笑顔で声をかけてくれた記憶がある。先輩との思い出はたったそれだけ。けれど麗奈は、あの時の先輩の笑顔を鮮明に思い出すことが出来た。

「いらっしやーい、麗奈ちゃん。」

本日出迎えてくれた笑顔は、思い出の中の先輩でも現在この部屋に住む後輩でもない。初めて会った日と同じ無邪気な声を出すコウは、今日も髪をカチューシャでバツクに流している。浮かれ気味に見えるコウに、こんにちは、と麗奈も笑顔で返した。メールこそたまにしていたけど、こうして顔を見るのは出会った日以来だ。

コウの後ろから少し遅れてアキも顔を覗かせる。一見恋人同士にも見える身長差の二人は、本当に見惚れるほどの美男子なのだ。

「準備できてますか？」

麗奈が訊くと、はい、とコウは片手を高く上げ、まるで、これから遠足に行く引率の先生と小学生ようだと思つた。「少し遠いですけど……。」と言ったあとで、自分のミスに気づき眉を寄せる。

「歩きだと、結構遠いかもしれないです……。」

麗奈の自転車に三人は乗れない。アキとコウに交通手段があるのかどうか、確かめるのをすっかり忘れていたのだ。しかし、

「あー自転車？あるある。ミサのが。」

逸早く言葉の意味を理解したアキは、一旦部屋に入ると自転車の鍵をカチャカチャいわせて戻ってきた。

それにしても隣の後輩は、本当にアキのことを信頼しているのだろう。部屋だけではなく、自転車まで預けてしまうとは。

アキの、いや、後輩の自転車の後ろにも、麗奈の自転車の後ろにも人が乗るスペースはあるというのに、男同士で二人乗りは嫌だというコウの我俣で、麗奈とコウの二人乗りが決まった。しかも、何故自分の自転車で後ろの席に乗らなければならないのか。すわり心地の悪い後ろの席を跨ぐと、コウが麗奈の腕を掴み自分の腰に強引に引き寄せる。子供のように体格はしっかり男の身体をしているコウの背中。甘酸っぱい匂いが鼻を攪り、麗奈は顔を赤くした。

「麗奈ちゃん、しっかりつかまっててねー。」

「……はい。」

「よーし、しゅっぱーっ。」

麗奈の心境などまるで無視で、コウはペダルに足をかけた。隣で後輩の自転車に跨ったアキがプツと噴出す。

「麗奈ちゃん、道案内よろしく。」

笑いを噛み殺しながら麗奈に道案内を頼むアキに「……はい。」と若干疲れて答えると、それにアキはまた噴出した。

「とりあえず真っ直ぐ行って、つきあたり左でお願いします。」

「ラジャ。」

一人で笑いに悶えるアキを無視して、力強く踏まれたペダル。夕暮

れの道をタイヤがどんどん加速する。吹き抜ける風は爽快だった。お尻の痛みも吹き飛ばしてしまうほどに。

介護科校舎の向いにある香奈恵たちの住む寮には、学校への登下校と変わらない時間で到着した。ノリ気だった真琴と愛のことだ。とつくの昔に準備を整え香奈恵の部屋で待ちくたびれているかもしれない。駐輪場に自転車を止めたあと、美男子二人を連れ立って麗奈は香奈恵の部屋へと向かう。二階建ての寮。一階中央にあたる扉が、今日の会場となる香奈恵の部屋への入口だ。鳴らした本日二度目のチャイムに、扉が開く前からキャツキャツと騒ぐ声と足音が部屋の中から聞こえた。

「いらつしゃい。」

最初に顔を出したのは、表情を強張らせている香奈恵。すぐ後ろに、真琴と愛のニコニコ顔。

「連れてきた・・・よ、って・・・」

麗奈が口を開いた同時に扉は全開まで開き・・・ドアノブを掴んでいた香奈恵がよろけ、麗奈は咄嗟に手を差し出した。麗奈の後ろにいたコウが、勢いあまって扉を開いてしまったらしい。

「うわ・・・ごめ。ん」

背後からの申し訳なそうなコウの声に、目の前の香奈恵がぶんぶんと首を横に振った。

「とりあえず、どうぞ、どうぞ。」

自分の部屋でもないのに愛と真琴が愛想よく招き入れてくれる。香奈恵を支えたまま麗奈は立ち居地をずらし、コウとアキに先に部屋へ入るよう促した。

「おじやましませーす。」

重なる男二人の声。

「ごめんね、ありがとう。」

小声で囁いてきた香奈恵に、「ううん。」と首を横に振って答える。

「麗奈も、入って。」

「うん。」

体勢を立て直し通り道をあけてくれた香奈恵に礼を言い、麗奈も部屋の中へ入った。

同じ1Kの部屋の造りは、麗奈の部屋とよく似ている。

薄いグリーンのカートン、同じ色のベッドの上の布団。収納家具が多い分、綺麗に整理された部屋。他人に部屋の物の配置を勝手に変えられることを香奈恵は極端に嫌う。

テーブル上には、開封されたお菓子の箱が広げられていた。床に置かれたビニール袋から未開封のお菓子の箱が透けて見える。

並んでいるジュースの缶と。それによく似たチュウハイの缶。コウの年齢に配慮して三人が買う物に迷ったことが、聞かなくても伝わってきた。

全員が適当な位置に座つたのを確認してから、それぞれの名前だけを簡単に紹介した。麗奈の役目はここまで。あとは本人任せで十分だろう。

アキとコウが、ハイテンションで場を盛り上げる。

真琴と愛が話しにノツていく。固まっている香奈恵と、傍観者の麗奈。

ある程度予想は出来た構図を眺めながら、麗奈はジュースの缶に口をつけた。

第一話：ジエイド（八）

手にしていた缶に「お酒」の文字が加わったのは、それから二時間ほど過ぎた頃だ。

一口もお酒を口にしていないはずのコウのテンションは、下がることを知らないらしい。右に愛、左に真琴。両手に花で、機嫌はすこぶる良さそうである。

ベッドに体重を預け酒をのんでいるアキはと言えば、かなり色っぽい。この中で一番アルコールに弱い香奈恵がアキの肩に寄りかかっているから余計にそう見える。

友人三人と飲み会をしたのは、まだ片手で数えられる程度。そこに異性が加わったのは今日が初めてで、意外な展開に麗奈は興味津々だった。

なにせ箱入りの麗奈である。気軽な飲み会すら三人とのものしか経験がなく、当然今までのそれは出会いの場であるわけがない。だが、高校時代のクラスメイトや専門学校の他のグループの子達の話から、異性が加わった飲み会でどういうものが見られるのかは漠然とは知っていたし、飲み会がきっかけで男女の交際が始まるのはよくあることなのだということも知識としてはあった。それだけに目の前で繰りひろげられている光景は、麗菜の好奇心をおおいに刺激したのだ。

傍観者の麗奈のことを気にするものはいない。おそらく皆、自分の事で精一杯なのだろう。

アキの長い指が香奈恵の髪を絡める。ついさつきまで石のように固まっていた香奈恵は、顔を赤らめアキを見上げている。あまりの甘さに見てるこっちが恥ずかしくなるけれど、香奈恵の幸せそうな姿は悪くない。

麗奈はまだ恋を知らない。博文との結婚話があがるまで、異性をそういう対象として見たことがなかった。

やれクリスマスだバレンタインだと、高校時代クラスメイトが色めいていたのが鮮やかに蘇る。ほんの一、二年前まで麗奈とたいして変わりなかったというのに、急に女として花開き始めた彼女達に当時は嫌悪感を抱いていた。

そう考えると、今の麗奈の心境は自分でも不可解だ。この三人の友人たちのことが本当に好きだし、こうして女としての顔を見せられても苛立ちより嬉しさの方が勝ってしまう。望んで得た普通の生活の中で友人たちと過ごしてきた時間が、麗奈を少しだけ成長させたのかもしれない。博文の存在が僅かでも自分の成長に関係している可能性は、認めたくないので排除した。

「そろそろ買いだし必要かな？」

「へ？」

いつの間にごちらへ移動してきたのだろう。突然真琴の囁き声が耳に届き、近すぎる距離に思わず仰け反る。

「買いだし。飲み物もうないから、私行ってくるよ。」

訝しげな顔で麗奈を見る真琴の言葉を受けて周りを見れば、確かに並んでいるのは空き缶ばかり。こういう細かいところに目が行き届くあたりは、さすが真琴だと思う。一見奔放そうで、実は四人の中では真琴が一番女らしい気配りが出来る。博文も嫁にするなら真琴みたいな女性がよかつたのでは？と、余計なことが頭の中を掠めた。

「いいよ。私が行く。」

今ある飲み物やお菓子を用意してくれたのは、真琴と愛と香奈恵だ。麗奈はアキとコウを連れてきただけでお金すら預けていなかったのだから、当然ここは麗奈が行くのが筋である。だが、

「俺も行くー」。男がいたほうが何かと便利でしょ?。」

「え?・・・あの、えーと・・・。」

自分で思っていた以上に声が大きかったのか。離れた位置からコウが即座に反応し立ち上がり、麗奈は内心慌てた。急いで一人で大丈夫、と告げようとしたけれど・・・、

「リクエストあるなら今のうちだよ、でも忘れちゃったらゴメンネ。」

時すでに遅し。両手を合わせ可愛さを振りまくコウに断りの文句を告げる勇氣は、残念ながら麗奈にはない。

「いこ?麗奈ちゃん。」

無邪気に微笑まれば、あとは頷くしかなかった。

この寮からなら歩いてでも行ける距離に、麗奈が買いたしに行こうと思っっているコンビニはある。外灯の照らす通りを真っ直ぐだから、深夜でもないかぎり女一人で行くことを躊躇することはない。むしろ、今更コウと二人つきりになる方が気まずい。これがアキだったら、もっと気まずかつただろう。

バッグを片手に、先に玄関へと向かうコウの後を続く。こういう事態に備えて財布には、普段持ち歩く額より多めにお金を入れてきた。高校生のコウに支払をさせるわけにはいかないし、かといって居候のアキにお金の余裕があるようには見えない。外に飲みに行くことを考えれば、コンビニで人数分の飲み物とつまみを買うぐらいバイト代で十分にまかなえる。

休日前の女子寮へ来客が多いのは、ここも麗奈の寮も同じだ。コウが開いた玄関の扉から外にいる人間の声が届き、麗奈は一瞬、躊躇った。介護科に通う生徒が多い寮だけにコウと二人で歩く姿を見られるのは戸惑いがあったのだ。だが、さっさと外に出てしまったコウを追わないわけにもいかない。渋々足を踏み出した麗奈は、外で騒いでいたのが知らない顔ばかりだと分かるとほっと息を吐いた。ここへ来る時と同様、麗奈の自転車のサドルに跨ったコウ。その後ろに乗れば、やはり腕を引っ張られる。アルコールが入っているせいだろう。目の前のコウの背中に熱を持つ類は隠せないけれど、たまにはこういうのも悪くないかと自然と麗奈の口元は緩んでいた。

第一話・ジエイド（八）（後書き）

未成年者の飲酒は法律で禁止されています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1601n/>

J e w e l r y b o x

2011年10月7日15時22分発行